

特集 1

□歯学部卒業おめでとう



歯学部卒業おめでとう

新潟大学歯学部長 井 上 誠

歯学科第55期生、口腔生命福祉学科第18期生の皆さんへ、ご卒業おめでとうございます。今年度めでたくご卒業される皆さんに、全教職員を代表して、心からお祝い申し上げます。また、保護者をはじめご家族の皆様方におかれましても、無事に卒業の日を迎えることができましたことを心よりお祝い申し上げます。

新潟大学歯学部は、1965年4月1日に、東京医科大学、大阪大学に次いで、日本海側初の歯学部として東北大学、広島大学とともに、日本で3番目の国立大学歯学部として設置され、2025年には60周年を迎えようとしています。この間、3,000名を超える卒業生を輩出し、歯科医療、歯科医学の教育、研究、社会貢献という見地から、全国に誇る「知の拠点」としての役割を果たしてきました。今年度ご卒業される皆さんに、その一員として社会に羽ばたく日を迎えたことを本当にうれしく思います。

皆さんのが過ごしてきた4年間、6年間の学生生活を振り返るにあたり、2020年以降、世界を震撼させてきた新型コロナ感染症（COVID-19）パンデミックとの関わりを抜きには語れないと思います。結果的には、対面での講義や実習が滞ったのは2020年のわずかな時期のみでした。しかし、キャンパスライフの中では、友人や家族との交流、部活動、さらに社会との交流が大きく制限されてしまい、出口が見えない中で日々を過ごさねばならなかつた皆さんの不安はいかばかりであったかと察します。私たち教職員も、自らの感染予防に注意を払いながらのリモート講義や非対面での指導などは経験のないものであり、結果的には

デジタル・リモートの活用を始めとする新たな手法を得たとはいえ、試行錯誤の日々であったと思い返しています。

近年の新潟大学歯学部の環境変化は、COVID-19をきっかけとした社会の変貌を伴うものだけではありませんでした。歯学教育や歯科医療技術を含めて、歯科を取り巻く環境は毎年のように目まぐるしく変化し、教職員にあってもこれらの変化に対応すべく日々精進してきました。新潟大学歯学部では、学生自らが主体的に学びを得る学習システムを先導的に推進し、歯科医師に求められる能力の育成を重視したコンピテンシー・ベースの教育、知識、スキル、態度・価値観を統合し、与えられた課題から学生自ら問題を見出し、解決策を立て実行するという問題発見・解決学習と、その学習成果を把握するパフォーマンス評価の開発・導入を行い、現在でも必要な修正を続けながらアップデートしています。皆さんのが当然のように経験したPBLやトリプルジャンプなどの教育スタイルを全国に先駆けて行ってきたのは新潟大学歯学部なのです。また、2024年1月の歯科医師法の改正により、法律に基づいて歯学生が臨床実習において歯科医師の指導監督の下、歯科医業を行うことができるようになりましたが、これも新潟大学歯学部では、独自に考案した主治医制度の下、歯科臨床教育学分野を中心としてこれまで一貫して診療参加型臨床実習を継続していたものであり、国立大学法人評価において、国立大学歯学部で唯一「特筆すべき高い質にある」と評価されているのです。

2023年5月8日にCOVID-19が季節性インフル

エンザと同じ五類感染症に位置づけられて以降、日常における感染対策を意識しつつも、収束後の日本は社会・経済ともに予想されるフェーズを異にする新たな社会・経済へと不可逆的な進化を遂げているように思えます。長年にわたる慣行・慣習が崩されるとともに、デジタル化・リモート化を前提とした活動がシフトから定着に向かい、人員削減や効率化が重視されるようになり、個人、団体、社会といったあらゆるレベルにおいて変革が生まれています。その中で皆さんには、競争が激

化している社会において高い評価を得ている新潟大学歯学部卒業の日を迎えました。私たち教職員は、皆さんが設備、教員、カリキュラムなどいずれをとっても恵まれた環境の中で、これから社会で活躍するために必要な知識、技能、態度が培われたこと、そのすべてはCOVID-19パンデミックにも負けなかったのだと自負しています。新潟大学歯学部を卒業したという高い誇りを胸に、大いに活躍してください。Bon voyage!





卒業を祝して

医歯学総合病院副病院長（歯科総括） 多部田 康一

歯学科55期生・口腔生命福祉学科18期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。長きにわたる努力の末、新潟大学歯学部の教育課程を修了し、学士の学位を取得された皆さんとそれを支えてこられたご家族、ご親族の皆様に心からお祝いを申し上げます。

皆さんは歯学部への入学前後に新型コロナウイルス感染症のパンデミックという特異な時代を経験した世代です。感染症による日常生活の変化や価値観の多様化、そこに生じる精神的なストレスも経験しました。この厳しい環境下で学び成長した皆さんは、これから歯科医療や社会福祉の分野で活躍するに必要な、社会的視野を備えた世代といえるでしょう。これまで皆さんは、歯学部において歯科医学、口腔保健医療・福祉学の重要な知識と基本技能を習得し、不变の土台を築くための学びを重ねてきました。これからは現場での経験を通じて、成熟したプロフェッショナルへと成長してゆく必要があります。是非ともその挑戦の過程を楽しみ、自己の研鑽を継続してください。

今後10年、20年後の社会は確実に変化します。少子高齢化の進行、疾病構造と医療ニーズの変

化、さらにはグローバル化や多文化対応の必要性を含めて歯科医療需要の形態は変わるでしょう。歯科医療はAIの影響が少ない分野とされていますが、その在り方も技術革新で変化するかもしれません。柔軟性と適応力をもってプロフェッショナルとしてのアップデートを怠らぬことが重要です。一方、優れた良き医療人として社会貢献することの価値は時代によらず普遍です。社会のため、患者さんのために働く奉仕の精神は、医療職に携わる皆さんの誇りを高め、仕事のやりがいを生み、皆さんの人生をより豊かにするものと信じます。

本学歯学部の卒業生の皆さんには、各々の分野で専門職業人としての尽力によって社会を支えるとともに、現在の医療技術や医療・社会福祉システムの発展や新たな創造を目指していただきたいと思います。若さと積極性を活かし、既成概念に囚われぬ挑戦により、自己実現とともに社会に貢献されることを願います。新潟大学歯学部・医歯学総合病院の教職員一同、皆さんの活躍を心より応援しています。

卒業生のことば

卒業にあたり

歯学科6年 五十嵐 貴洋

この度、歯学部ニュースを執筆させていただくこととなりました歯学科6年の五十嵐貴洋です。今までの歯学部ニュースを拝読しており、執筆依頼が来た際には、とうとう自分の番が来たかと思いました。この機会に歯学部で過ごした6年間を振り返っていこうと思います。拙い文章ではありますが、少しの時間お付き合いください。

1年生の頃は、そこまで勉強は難しくなく、大変自由な時間を過ごすことが出来ました。2年生になり、より専門的な学習が始まり、最初の方は勉強についていくのがやっとでした。学年を上ることに覚える量は多くなり、内容も難しくなり、この6年間で数え切れないほどの再試験を受けたと思います。もう少し真面目に講義を受けて、勉強すれば良かったと反省しております。

無事進級することができ、5年生後期から臨床実習が始まりました。この臨床実習が6年間で一番印象に残り、忘れることが出来ないほどの濃い時間になりました。先輩からの引き継ぎが終わり、1人での診療が始まると不安な気持ちでいっぱいでした。しかし、自分でやるしかないと気持ちを切り替え、教科書や参考書、論文、使用材料の添付文書などを予習して実習に望んでいました。実際に患者さんへの処置をすることで、技術や術式、知識に関して理解も深りました。また、先生方の手技を間近で見ることで、ポジショ

ンや一つ一つの細かいテクニックだけでなく、医療者としての心構えなど学ぶことが出来ました。

臨床実習を通して、診療において最も重要なことは、問題・主訴に対してどういったアプローチをするべきか導き出すことだと考えました。問題・主訴に対して原因を突き止め、その原因を解決するために筋道立った治療をしないといけません。このような思考プロセスを養うことが本実習の目標とし、日々愚直に前進しました。少しは成長出来たのではないかと思います。

最後に、大変な臨床実習を乗り越えることが出来たのは、55期の仲間たちのおかげだと思います。辛い時や、行き詰った時、悩んだ時、怒られた時に、励ましてくれたり、笑わせてくれたりといつも気持ちを楽にさせてくれました。本当にありがとうございました。また、お忙しい中、ご指導くださった先生方に深く感謝申し上げます。この貴重な経験を糧に、歯科医師国家試験に合格し、今後より一層精進してまいります。



筆者最前列左から1番目

卒業生のことば

歯学科6年 金 城 こころ

このような表題の原稿を書かせていただくにあたり、もう入学から6年も経ったのか、と大変感慨深いです。6年前に地元を離れ新潟に来て、ごはんとお酒の美味しさに感動し、そして冬の天気の悪さに絶望したことが懐かしいです。

新潟大学歯学部で過ごした6年間は、私にとってあっという間であり、またかけがえのない時間でした。振り返ると、この大学生活の全てが貴重な経験でした。その中でも最も印象深いのは、やはり5年生後期からの臨床実習です。

新潟大学は全国でも数少ない診療参加型の臨床実習であり、自分が主治医として実際に患者さんを治療することができます。当然ですが、それまでの模型実習とは全くの別物でした。始めの方は、診療前日は緊張で眠れず、診療中も口腔内診査の際にはミラーを持つ手が震えていました。協力してくださった患者さんには、時間が長くかかってしまったり、診療がスムーズにいかなかつたりと、ご迷惑をお掛けしましたが、どの患者さんも温かく見守ってくださいました。患者さん一人ひとりに真摯に向き合い、治療計画を立て、実際に治療を自分の手で行うという、貴重な経験を積むことができました。毎診療、事前に教科書や講義資料を読みレポートを作成し、先生とのディスカッションを行い、診療後には反省と振り返りを欠かさずに行いました。診療内容の暗記ができずプレチェックを4回行ったことも、ブリッジ調整が全く終わらず泣きそうになったことも、今では良い思い出です。お忙しい中、時間を

かけて何度も指導してくださった先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。この臨床実習では診療技術だけでなく、精神的にも大きく成長することができたように感じます。最後の診療で患者さんから「あなたに担当してもらえて良かった」と言ってもらえたことは、この先も一生忘れる事はないと思います。

最後になりますが、この6年間、私は多くの方々に支えられ、学び、成長することができました。親身になって指導してくださった先生方、共に学び合った同期、そして支えてくれた家族や友人たちには、心から感謝しています。卒業後、歯科医師として社会に貢献できるよう、日々努力を惜しまず、患者さん一人ひとりに対して真摯に向き合っていきたいと思います。

卒業と共に歯科医師として新たな一步を踏み出す私たちを、今後とも温かく見守り、応援していただけますと幸いです。



実習最終日に撮影（筆者前列右から2番目）

6年間を振り返って

歯学科6年 角屋 知佳子

この度歯学部ニュースの執筆という貴重な機会を賜りました、歯学科6年の角屋知佳子と申します。先日、長いようで短かった1年間の臨床実習を無事に終えることができました。新潟大学に入学してから今日までの日々を振り返り、卒業生のことばとさせていただきたいと思います。

2019年、新生活に期待に胸を膨らませ地元茨城から新潟に越してきました。新潟はいつも曇天で、6年間元気に過ごせるのだろうかと心配になったことを覚えています。2020年以降は新型コロナウイルスが猛威を振るい、キャンパスを移動してせっかく始まった基礎科目のほとんどがオンライン授業になりました。覚えること、理解することが多く複雑で、受け身で勉強するだけではいけないと実感する日々でした。実習では、自分の不器用さに悩みながら、同期の友達と協力したり、何度も先生方に見ていただいたりして、少しづつ力をつけることができたと思います。最近ロッカーの整理をしていて当時の製作物を見返す機会がありましたが、臨床の場で適切に診療ができたのは、基礎実習で十分に技能を獲得できてい

たからだと感じました。

そして、5年次後半から始まる臨床実習はこれまでの集大成として大きな学びとなりました。今まで模型で行っていたことを、実際の患者さんに対して行うということに最初は不安を感じていましたが、「治療してくれて助かった」、「あなたが担当してくれてよかった」と話す患者さんの笑顔が見られたことは嬉しい思い出です。また、患者さんの体調不良によって立案していた治療計画通りに診療を進めることができず、人を相手とする職業の難しさを実感したことも印象に残っています。

私は、6年生になるまで自分の将来像について具体的なイメージができていませんでした。しかし、卒業後の臨床研修先決定のために各施設を見学し、臨床実習でさまざまな専門診療科を体験したことは、将来について深く考える良い機会となりました。在学生で将来について不安を抱えている方には、焦らなくても自ずと興味があることは見つかるよと伝えたいです。

最後になりましたが、これまで支えてくださった先生方、大学関係者の方々にこの場をお借りして感謝申し上げます。これからも、新潟大学で学んだことを心に留めて日々精進していきます。



臨床実習終了後に55期ポーズで（筆者下から2段目左端）

感謝の4年間

口腔生命福祉学科4年 竹内碧衣

この度、「卒業生のことば」を執筆させて頂くこととなりました、口腔生命福祉学科4年竹内碧衣です。執筆のお話をいただいた時、もうそんな時期かとハッとした。この大学生活も終わりが近いのだと改めて感じ、少しの達成感とともに大きな寂しさが襲ってきます。今回このような機会を頂きましたので、私の大学生活について振り返ってみようと思います。ぜひ一読いただければ幸いです。

私の大学生活での1番の思い出は、自分の夢を見つけることです。私は入学当初、明確にやりたいことがありませんでした。国家資格を2つ取って安定した職に就きたいとぼんやり考えていました。しかし、3年生の春、福祉実習で現場を知ることで、福祉分野にとても興味を持つと共に福祉分野に残る多くの課題を実感しました。その時私は、福祉についてもっと知りたい、福祉をもっと世間に広めたいと思うようになりました。そして、これが本当に自分のやりたいことだと、私の夢だと確信しました。やりたいことも無く入学した自分が、夢を見つけて卒業できることをとても嬉しく思います。夢を与えてくれたこの新潟大学に感謝します。

そして、この4年間を振り返ると、やはり4年

生としての1年間が特に印象的だと感じます。臨床実習を軸に、福祉実習や国試対策、特論や就活を同時に走らせながらの生活だったので、今までより格段と忙しく、めまぐるしい毎日でした。自分が本当にやりたいことは何なのか考える日々、勉強不足を痛感し落ち込む日々、明日が憂鬱だと思う夜もありました。しかし、それでも足を止めずに歩いてきました。苦しみや悩み、葛藤たちが導火線となり自分を強くしてくれました。この経験は私にとってかけがえのないものであり、この先もずっと私を支えてくれることだと思います。そして、もちろん楽しいこともたくさんありました。友人たちと何気ない会話で盛り上がったり、勉強や実習を頑張った日には美味しいご飯を食べたり旅行に行ったり、時には互いの将来や悩みについて語り合ったりしました。その共に過ごした時間が、何よりの宝物だと思います。18期生の皆は、本当に真面目で一生懸命でいい人たばかりで、毎日毎日支えられてばかりだったように思います。18期生の皆、ありがとうございました。皆の未来が明るく輝くことを心から祈っています。

最後になりますが、改めて4年間ご指導していただいた口腔生命福祉学科の先生方をはじめ、病院の先生方、歯科衛生士さん、すべての方に大変感謝申し上げます。ありがとうございました。新潟大学の卒業生であることを誇りに、これからも精進して参ります。



口腔生命福祉学科18期生（筆者前から2列目の左端）

卒業生のことば

口腔生命福祉学科4年 山内嬉子

大学生活も残り4ヶ月となり、二年間の時の流れの早さを強く実感しています。私は編入学当初、大学病院での臨床実習ではどれだけ高度な知識と技術が求められるのか、既に形成された人間関係の中に溶け込めるのか、という大きな不安を抱いていたことを覚えています。しかし、今現在その不安は代替がたい自信と思い出へと移り変わりました。

大学病院での臨床実習では、教科書でしか見られなかった多くの症例や治療法を実際に自分の目で見ることができ、歯科への追求心がますます大きくなっていました。そして、歯科医師・歯科衛生士の方々の、患者様お一人お一人を大切にした丁寧な歯科医療の提供には毎回感銘を受けました。また診療に追われる中でも、常に熱心にご教授してくださり質の高い学びを得ることができたことに感謝しております。今後も口腔衛生管理のプロフェッショナルとして責任を持ち多くの人々の口腔内に介入していくために、現状の知識と技

術に満足することなく自己研鑽に励んでいきたいと思います。

社会福祉現場実習では、一ヶ月間障がい者施設に行かせて頂きました。障がいのある方と関わるのは初めてで、距離感やコミュニケーションの壁にぶつかりました。頭の中では自分と変わらない人間であると分かっていても、どうしても構えてしまい障がい者福祉の難しさを実感しました。しかしそれと同時に、障がいの方から多くの学びや喜び、幸福感を共有してもらい、支え合いとはこのようなことだと理解することができました。障がい者ののみに限らず誰にとっても生きやすい社会を創り出すために、社会の一員として責任をもって考えていかなければならぬと気付かされた実習でした。

臨床実習、特論作成、就職活動、国家試験勉強と忙しい一年でしたが、その中でも高い志を持って和気藹々と共に励んできた口腔生命福祉学科4年生の皆には感謝で一杯です。教室でのクラス会は最高の思い出となりました。今後は、それぞれ別々の道にはなりますが、学生生活で得られた繋がりを大切にしながら新しいスタートを切っていきたいと思います。



実習後半期に撮影（筆者1列目左端）